

10周年記念企画

授業実践報告 (インタビュー)

マルチモーダルインタラクションの動的構造

伊藤 紀子 (言語資源研究室)
阪田 真己子 (身体メディア研究室)
鈴木 紀子 (嘱託講師)

コミュニケーションを多角的、総合的に研究

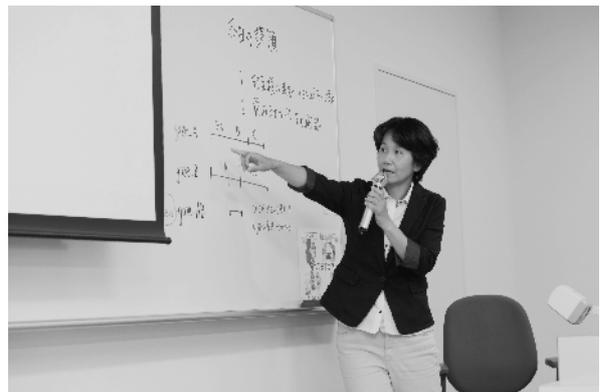
人間は、言語による受け答え以外に身振り手振り、視線などの非言語的な複数の手段を使って、トータルにコミュニケーションしています。ところが学問の世界では、言語行動と非言語行動は従来、個別に研究されてきた経緯があります。この「ジョイント・リサーチ」では、言語学が専門の伊藤先生と身体表現研究が専門の阪田先生、情報学が専門でグループワークにも詳しい鈴木先生の女性研究者3人が、実験や演習を通じて学生たちにコミュニケーションの本来のあり方について多角的、総合的に指導しています。

マルチモーダルインタラクションの「ジョイント・リサーチ」は、2011年から始まり、4年目の今年は3年生26人が受講しています。学生たちは4-9月の春学期は2、3人のグループに分

かれて、それぞれが実験参加者になり、共通の特定のテーマについて会話した映像をデータ分析します。会話内容はもちろん、「アー」「ウー」などのいい澁み、その時間情報などを全て書き上げ、身振り手振り、うなずきなどのジェスチャーについても詳細にデータ化します。学生たちはこの期間にコンピュータソフトを使った言語、非言語行動の分類や分析の手法などの基礎を身につけることになります。

教員をわくわくさせる秋学期の研究テーマ

10月に秋学期が始まると、学生たちは新しい4、5人のグループに再編成され、今度は自分たちでグループごとの独自のテーマを決めます。ここからは応用です。グループごとに実験を行い、データを収集して分析し、発表したものをそこでの質





問や意見を反映してブラッシュアップし、最終レポートにまとめ上げます。過去3年間にジェスチャーをテーマに選んだグループがありました。「キャッチボール」などの言葉を身振り手振りで伝えるのですが、言語を介さない身体表現だけでどれだけコミュニケーションが成り立つかという面白い研究でした。また、インディアンポーカーというカードゲームを取り上げたグループもありました。山札から1枚トランプを引いて自分には見えないように額の上に持ち、交換などで自分が優位に立てるよう駆け引きするゲームです。これは、人は嘘をつく時にどうコミュニケーションするかという興味深い研究でした。毎年、学生らしい斬新で創造性あふれるテーマが出てくるので、今年はどんなテーマかと3人の教員たちを心待ちにさせるほどです。

受講している学生たちの動機は、人と会話するのが好きだからとか、逆にコミュニケーション力をつけたいとか、就活の面接の助けになりそうだからとかさまざまですが、コミュニケーションというものに何らかの形で関心がある研究熱心な学生がそろっています。実験の準備やデータ解析の作業量が多く学生たちは大変ですが、常に熱心に授業に取り組み、レベルの高い成果を残してくれるので、GPAの成績もほとんどがAかB評価を受けています。「ジョイント・リサーチ」のコミュ



ニケーション分析演習で鍛えられた学生が4年生になって伊藤先生、阪田先生のゼミを選択する好循環が生まれています。

学際研究を大学の授業で実現した先進性

こうしたコミュニケーションを学際的に追究する実証的アプローチは、大学院以上の授業や研究者同士の共同研究としてしか行われていませんでした。それを学部の授業として、各教員がマニュアルを作成したシステムティックな方法論で実施できているのは先進的な取り組みだと自己評価しています。また、授業で収集するデータはコミュニケーション研究にとって非常に貴重なものです。これまで、自由な発想を求める拡散型会話や対象を一つに絞る収束型会話、クリエイティブコミュニケーションなど毎年工夫を凝らしています。

文理融合や学際研究にとって、学生たちの新鮮で柔軟な発想は、欠くことのできない貴重なものです。テーマ選択などでは、学生たちの興味や気づきをできるだけ大切にしています。学生たちはそれぞれのテーマを効率よく、面白くまとめ上げて、うまくプレゼンテーションします。社会に出れば限られた資源、時間で自分のアイデアを形にすることが求められますが、そのいい訓練の場にもなっています。